

令和 6 年度 第 2 回 西東京ボランティア・市民活動センター運営委員会要点記録

■日 時:令和 6 年9月 10 日(火)18時 00分～

■会 場:オンライン(Zoom)

1. 報 告 事 項

(1) 業務報告(令和 6 年 5 月～8月)について【資料 1、2、3】

(2) 業務予定(令和 6 年9月・10月)について【資料4】

(3) 「夏!体験ボランティア 西東京 2024」について【資料5】

○事務局より、(1)～(3)について資料を用い説明を行った。

【委 員 長】質問はあるか。

【理 事】ボランティア登録の際、一般と特技に分かれているが今回は特技のボランティアが多いが特技の内容を知りたい。

【事 務 局】マジックの方とアコースティックギターの演奏の方が登録された。

【委 員 長】特技ボランティアのリストは作ってあるのか。

【事 務 局】表に出すように作ってはいない。特技披露を依頼された際、希望を聞いて登録ボランティアを紹介するが、いない場合はつてを頼り探して声掛けをしていくこともある。

2. 審 議 事 項

(1) 令和 6 年度第1回西東京ボランティア・市民活動センター運営委員会要点記録(未定稿)について【資料6】

3. 協 議 事 項

(1) 令和 6 年度下半期事業予定について【資料7】

【事 務 局】11月に予定しているボランティア懇談会とスキルアップ講座は障がいの理解を目的とし、理事の協力を得て、手をつなぐ親の会が進めている知的障がいや自閉症を疑似体験するプログラムを登録ボランティア対象に行う予定である。

【委 員 長】講座について理事に説明をお願いしたい。

【理 事】知的・発達障がいは目に見えない障がいで分かりにくい。手袋をはめてシールを貼ってもらい、その時にどのような声掛けがあるとどんな気持ちになるのかを体験してもらったり、レストランで子どもがパニックを起こした時、誰の立場だったらどんな気持ちになるのかなどを考えてもらう疑似体験のプログラムが大人向け、子ども向けなどいくつか項目がある。練馬区では区内の小学校で何校も行っている。西東京市でも浸透させていきたい。

【委 員 長】このような取り組みが広がっていくのは良い。他にないか。

【委 員 長】8月30日に予定していた災害ボランティア養成講習会が台風の影響で延期となった。秋から冬に実施になると思う。

【事 務 局】開催時期は検討中で未定である。

(2) 令和7年度事業計画について【資料8】

【委員 長】5.教育機関への協力と連携の取り組みについては今年度も継続していく。進展があれば事務局から報告をお願いしたい。

【事務局】委員から校長会に出てみたらどうかと意見をいただき6月5日に参加し、ボランティアセンターの業務や夏!体験ボランティアの説明をした。委員に口添えしてもらいコミュニティスクールを切り口にボランティアセンターが手伝えることがあることも話した。翌日には小学校から連絡があり「学校の近くにある二つの高齢者施設と交流したいので仲介して欲しい。」と依頼があった。高齢者施設へ話したところ両施設とも快く受け入れてくれた。また、もう一つの総合的学習への協力では盲導犬や聴覚障がい者の講演、手話体験に特化している。ボランティアセンターでは昔から提供しているプログラムで、障がい当事者が出向き、子どもたちにとって学びにつながる授業をおこなってきた。総合的学習の範囲は広いと聞いている。これ以外にも委員の助言をいただきながら小・中学校と連携していければ良いと考える。

【委員 長】校長会でボランティアセンターが広報したことと、総合的学習で提供している盲導犬や手話以外で要望があるのか、この2点を委員に聞きたい。

【委員 員】学校に広報し続けていくことは必要である。今後総合的学習の時間に、より関わるのであれば西東京市の取り組みで「ふるさと探究学習」を行っている。自然環境や歴史、産業など自分たちが住んでいる西東京市について学ぶことを目的として全校で行っている。ホームページから各学校の事例を見ることができる。新たに提供するコンテンツを用意するのならばボランティアセンターがつなぐ方々をコンテンツ化することが良いのではないか。人材リストがあれば学校に喜ばれる。

【委員 長】ボランティアセンターが、ただつなぐだけではなく人材バンクのようなものがあり、そこからボランティアセンターにつながるができる仕組みができると良い。西東京市でコミュニティスクールを行っている中でコーディネーターが学校からの要望に応えるためにボランティアセンターに相談し人材発掘を行っている。ボランティアセンターは心強い頼りになる機関である。例えば「ふるさと探究学習」で歴史に詳しい方についてのニーズに対しボランティアセンターはどう考えるか。

【事務局】そのような方々を集めることもボランティア活動を勧める良いツールになると考える。以前、高齢者のデイサービスから「西東京市の歴史を知る」ということをテーマにプログラムの一コマをいただいた。その際に西東京市で活動されている歴史研究会の方にボランティアをお願いしたことがある。

【委員 長】学校も希望する人材にたどり着けなかったり、ボランティアセンターにどのように相談したらよいのか分からなかったりする部分もある。今後はボランティアセンターがつながっていくための手法なども発信していくと良いのではないか。

【事務局】ボランティアセンターは様々なことを行っているが、それらが知られていない。ボランティアセンターの役割を周知していくことが必要だと再認識した。

【委員 員】学校では生徒に限らず若手教員が研修を受けるがメニューを決めてボランティアを行う。年間30名ほどが保育園や図書館などで一定時間のボランティアを行っている。ボランティアセンターが関わることができれば活動の場が広がるのではないか。

【委員 長】学校との連携がPR次第で広がっていくのではないか。

【事務局】夏!体験ボランティアに教員が新任研修でボランティアを選んで来ている。知らせていくことが有効だと感じた。

【委員 長】新任の教員が地域のお祭りにボランティアとして参加し地域の人たちと交流する取り組みを行っている。ボランティアセンターがPRのため校長会へ出向いた結果1校からオーダーがありつなぐことができたこと聞いたが学校側の横のつながり、連携はあるのか。

【委員 員】各校長は市の多方面の団体の委員となり派遣されている。主なものについては毎月の校長会で報告がある。

- 【委員長】学校とボランティアセンターとのつながり方が分からないという点では仕組み作りを考えた方が良いのか。大学ではどうか。
- 【副委員長】先ほど委員長より月次報告の中で特技ボランティアのリストの話が出たが、一度つなげたら終わりではなく、似たようなニーズがあるところにマッチングしていく際のストックがあるというのは大事なことである。リストとし資源化することがポイントではないか。コーディネートの実績表でつなぐことができなかった活動について地域のニーズが潜在的にあるのであれば、新規のボランティアを発掘する際にメニューの中にそれを解決するための講師を招いてスキルを習得する機会を提供していけばニーズが埋まるのではないか。また、「ふるさと探究学習」で郷土史を学ぶというニーズがあり、資源も既にあるが広報が弱くつながらないのであれば、ハードルを低くし学校や子どもたちがボランティアセンターに相談に行ってみようと思えるような広報が必要ではないか。大学でも今後福祉の仕事に就いてみようとかボランティア的な課題などが出てくる。ボランティアセンターに行けば活動の場を探しやすかったり、橋渡ししてもらったり、活動の成果をフィードバックできたり、つなげた結果がどのようなことを生み出したのかを他者へ広報できればボランティアセンターを使ってみようとなるのではないか。活動後の成果を発信していくと良い。
- 【委員長】今回 1 校とつながったので実践報告を校長会で広報していくとボランティアセンターの存在を知ってもらえるのではないか。
高齢者施設とボランティアセンターのつながりはどうか。
- 【委員】現在もボランティアセンターから紹介されたボランティアが定期的に来ている。新たなボランティアを探したいときにボランティアセンターの名前は直ぐに出ている。
- 【委員長】高齢者施設にとってボランティアセンターは身近な存在であり、利用の方法もわかっているということか。学校はボランティアセンターまでたどり着けていないのか。ボランティアセンターを経由せずにつながることもあるのか。
- 【委員】学校は意外と閉ざされた世界でこれまでの慣習に則ることが多い。新しいことで大きな効果が期待されるのであれば喜んで行っていく。
- 【事務局】ボランティアセンターとして足りなかった点など、ご指摘いただいたところを確実に行っていけば認知度も上がっていくと感じた。
- 【委員】傾聴サロンを立ち上げてから分からないことがあればボランティアセンターに相談している。駆け込み寺の様に頼りにしている。学校との連携の中で何かに特化した人材について話が出たが、傾聴サロンの利用者は高齢者が多いので地理や地域に詳しい人もいる。利用者の中から人材発掘することもできる。
- 【委員長】得意なことがある人をリストアップしていくことも大事である。いざという時にコーディネートし紹介できるのではないか。ボランティアセンターに更なる期待をする。
- 【理事】身近に感じてもらうためにどのようにしたら良いのか。市内の小・中学生に広めていく流れができれば良い。大学生ができるボランティアはないかと考えた時、学生らしい特技で役に立つことがあれば学生にとっても良い体験になる。若者の力を求めているというアピールの仕方も良いのではないか。
- 【委員長】特技を持っていても披露するチャンスが無いのはもったいない。登録してもらい積極的に声掛けをしていくことが中間支援組織であるボランティアセンターの役割が前面に出てくるのではないか。

(3) 令和 7 年度予算について【資料 9】

○事務局より、(3)について資料を用い説明を行った。

(4) 夏!体験ボランティアの報告から考える今後の取り組み(意見交換)【資料10】

【事務局】受け入れ施設はコロナがあけて増加したが、申込者数は昨年と比べ減少している。今年度は参加証明書の発行を行うということで参加者が増えるのではないかと予想していたが減ってしまった。特に中学生、高校生の減少が大きかった。しかし、今年度の状況として昨年よりもリピーターが増えている。また、ここ数年体験者が少なかった障がい者施設での希望者が増えた。体験した小学生が「とても楽しかった。」と帰って来たと保護者から報告を受けた。他にも大学生から良い体験になったと聞いている。受け入れ側アンケートを見ると特に問題はなく好意的な意見が多かった。参加者アンケートを見ても「非常に良い経験になった。」「今後もボランティアに参加したい。」という嬉しい結果となっている。なぜ減少したのか、近隣市の状況では概ね変わらず、増えた市もあった。都内の結果が知りたい。

【委員】都内のデータについては夏ボラ担当者会議で結果が出てくる。ブロック会議や担当地区の話を聞くと、ある市では私立学校の生徒の参加が減っているところもあれば、社会人の参加や学校の新任研修で参加しているところもあるという状況である。

【事務局】ボランティアセンターとして原因を考えたが思い当たることが無い。唯一あるとすれば参加申し込み受付期間が昨年度と比較して5日間少なかったことである。これが原因ならば来年度は改善したい。参加証明書についてはやって良かった。昨年度「証明書を出してもらえるか。」という問い合わせが多かったが、今年度はホームページに載せたこともあり無かった。参加証明書が無ければもっと減っていたのかもしれない。また、小学生にも喜んでもらえる「ありがとうカード」を作成した。裏面にはクイズも載せた。参加者の半数以上が受け取りを希望してくれた。

【副委員長】今年度学校への周知についてタイミングがぎりぎりになってしまうと委員より助言を受けた。次年度はどのタイミングで行うのかを念頭に動くのが良いのではないかと。中学・高校の生徒は学校の先生の声掛けにより上がったり下がったりするのではないかと。そのためには先生への周知が大事ではないかと。また、夏ボラがボランティアの導入の入り口であるのなら、定期的なボランティアにつながっていくと良い。定期的なボランティアが定着していることにより新規の数が減っているのであれば数にこだわる必要はないのではないかと。

【委員長】リピーターが多かったという結果が出ているのは良い。広報の時期についてはどうか。

【委員】「夏!体験ボランティア」については4月、5月になると思う。教育課程の中にボランティアを織り込んでいくのであれば2月の中旬に大枠ができ、その後に次年度の予定を入れていく。中学校はさらに早いので1~2月が良いのではないかと。年度途中に入れていくのは難しい。

【事務局】どの程度の準備ができるのか考えていかなければならないが、1~2月が大切な時期だと分かった。

(5) 委員選出について【資料11】

○事務局より、(5)について資料を用い説明を行った。

4. その他

(1) 次回 運営委員会 日程について

■日時: 1月14日(火) 18:30

■会場: オンライン(Zoom)

(2) その他

配布資料

- 資料 1: 西東京ボランティア・市民活動センター事業月次報告(令和6年5月~8月)
- 資料 2: ボランティアコーディネート状況月次報告(令和6年4~8月)
- 資料 3: ボランティアコーディネート実績表
- 資料 4: 西東京ボランティア・市民活動センター事業業務予定(令和6年9月・10月)
- 資料 5: 夏!体験ボランティア西東京2024 報告
- 資料 6: 令和6年度第1回運営委員会要点記録(未定稿)
- 資料 7: 令和6年度年間スケジュール
- 資料 8: 令和7年度事業計画(案)について
- 資料 9: 令和7年度予算(案)について
- 資料 10: 夏!体験ボランティアの報告から考える今後の取り組み(意見交換)
- 資料 11: 運営委員会 委員名簿

参考 : ぼらんていあ倶楽部第127号(令和6年8月15日発行)